

コンピテンシーを基準とした 人材育成 経済・加藤 恭子准教授

一般的に人事労務管理
といえ、イメージ的に
労働組合対策といったこ
とになるが、企業におけ
る社員の心理的な面
の観察やホワイトカラーの管
理などのイメージが強い
のが「人的資源管理」で
あり、加藤准教授はこの
分野を専門としている。



研究室には観葉植物の代わりに緑色のカエルグッズを配置

成果よりもプロセス評価を重視 能力発揮の行動特性が決め手

以前、企業は年功序列
や能力基準資格等級の取
得などで評価する能力主
義が主流であった。バブ
ル崩壊後は結果で評価す
る成果主義を取り入れた
が、コンピテンシーを
用いたプロセス評価。仕
事の期間中に取った行動
や、行動によって発揮さ
れた能力などを評価基準
にして、人材育成に生か
していくというものが目
的となっている。



8月に新潟県苗場で2泊3日のゼミ合宿を

出し、その行動を入社後
も継続できるかどうかを
判断して採用するという
方法が用いられている。
加藤准教授の研究は、
共同研究の「ビジネス
プロセス・アウトソーシ
ング」は、企業運営上の
業務処理を専門業者に外
部委託すること。中国で
は事務系の業務を委託さ
れることが多く、中国人
が日本企業の給与計算等
の賃金管理を行ったり、
生命保険に関する医師の
医療診断書を瞬時に入力
している。

「ゼミ」の企業訪問は活発
加藤准教授は、人とモノ
をつなげるのが好きでテレ
ビの会社で就職し、教育
プログラムの企画・運営方法
を学ぶ。その実践として、ゼミ
生が直接アポイントメン
トをとって企業訪問を行
い、制度の取り入れ方や
実際の利用度、運営方法
を学ぶ。その実践として、ゼミ
生が直接アポイントメン
トをとって企業訪問を行
い、制度の取り入れ方や
実際の利用度、運営方法
を学ぶ。

近・現代の写真の思想や哲学を 考察 芸術・西垣 仁美教授

「研究のために写真展
や写真集をよく見ます」
と話す。写真展に足を運
ぶ回数は年間600回を
超すことも。銀座や新宿
などギャラリーの多い場
所では一日に10以上の写
真展を見て廻ることがあ
るといふ。

作品の傾向を考察するこ
とを研究の核としてい
る。写真を取り巻く環境は
年々変化する。カメラも
デジタルが主流になり一
般的には銀塩フィルムを
使用する人はほとんどい
ない。しかし、写真は写
真であり、銀塩やデジタ
ルという手段に関係なく
存在し続ける。西垣教授
は指摘する。

写真誕生当初は、実際
の事物を目で見たとわり
に正確に記録することが
芸術だった。ところが、
正確に写すだけでは芸術
ではないと指摘される。
「19世紀末には絵画的な
写真表現が流行し、ソフ
トフォーカスレンズの多
用や現在、古典技法と言
われる手を加えた印刷技
法が好んで使われるよう
になります。20世紀にな
ると写真の表現は、レン
ズによる正確な記録性を
生かし、対象をストレ
ートにとらえた描写が写真
独自の表現として認識さ
れます。」

西垣 仁美（にしが
き・ひとみ）昭和59年
（理事）、日本映像学
会に所属。主な研究テ
マは「写真表現の動
向」「写真の
プロフィール
思想・哲学に
関するテキストの研
究」「オリジナルプリ
ントの制作技術」な
ど。東京都出身。



「写真の発明は感光材
料・定着方法の発見で
す。すなわちカメラで作
られた像を記録する手段
でした」
「写真の発明は感光材
料・定着方法の発見で
す。すなわちカメラで作
られた像を記録する手段
でした」

「写真の鑑賞は年間600回も
オリジナルプリントにこだわり
幼い頃から写真を見るための教育も必要」
「写真の鑑賞は年間600回も
オリジナルプリントにこだわり
幼い頃から写真を見るための教育も必要」

写真集『紫陽花』に出品した作品と一緒に
「世界平和を願って
献できると思います。い
ま世界で起きている現実
を伝える手段。平和を問
います」